

B 比爪館跡と周辺の文化財

五郎沼薬師神社

B7 薬師神社

薬師神社は、比爪館跡区画の南西部に鎮座している。創建時期や由来は定かではない。社伝によれば、樋爪俊衡が国家安穩・武運長久の祈願のために勧請したと伝えている。少彦名命すくなひこなのみことを御祭神とし、現在は本殿・幣殿・拝殿・社務所のほか、神前で奉納される神楽や舞が行われる神楽殿を構えており、地方の神社としては格式を重視した歴史ある神社といえよう。

薬師神社は、盛岡藩領内の社堂の沿革を記録した宝暦13年(1763)の『御領分社堂』によれば、「日詰通代官所日詰村 一 薬師堂 三間四面かやぶき萱葺 大莊厳寺持 寛永年中 重直公御再興被 仰付、其後享保年中 利視公御再興被 仰付、棟札有、由緒ハ不相知」と記されている。この記録から、薬師神社は寛永年間(1624～1644)に三代藩主南部重直、享保年間(1716～1736)に八代藩主南部利視によって再興されていることが知られるが、当時でも由緒は不詳としている。

藩主利視は、寛延2年(1749)に盛岡城内に盛岡藩初代南部信直の神霊を勧請した淡路丸大明神(現在の櫻山神社)を創建し、神社・神道を崇敬した藩主として知られる。また、同記録によれば、薬師神社は明治期まで「薬師堂」と呼ばれていた。薬師堂とは、薬師如来を本尊とする仏堂の呼称である。

先の『御領分社堂』では、薬師神社は寺院持社堂として分類されている。つまり、薬師神社は、かつて比爪館の区画に建立された大莊厳寺持ちの社寺として把握され、江戸時代を通じて神仏習合の影響を受け、大莊厳寺の鎮守社であったことが知られる。

神仏習合とは、日本古来の神祇信仰と仏教信仰が混淆こんごう(集合)し、一つの信仰体系として再構成されたものである。これは通常、仏教が神道を取り込むための理論とされ、仏教主体の理論であるとされている。

神仏習合にはさまざまな形がある。その一つは、仏教側の理論であることから、神々も人々と同じように、輪廻りんねの中で苦しむ存在であり、神も仏法による救済を必要とするという考え方から、その神々を解脱に導くために「神宮寺」(神願寺・神護寺)と呼ばれる寺院が神社の境内や隣接場所に建立されることになる。ここでは、神前で読経するなど寺の別当が神社の祭祀を仏式で挙行した。

二つ目は、神は仏法を守護する存在であるとする考え方から、仏法を守護する鎮守神として「鎮守社」と呼ばれる神社が寺院境内などに建立されることになる。

このように神と仏の距離が縮まっていく過程で、平安時代後期頃に「本地垂迹説」という考え方が成立していった。本地垂迹説とは、本体たる仏が衆生救済のために、仮に神の姿となって現れたものだとする思想である。例えば阿弥陀如来の垂迹が八幡神、大日如来の垂迹が伊勢大神であると説かれる。

中世後期以降、仏法を守護する鎮守社は、地主神と習合、混同され、邸宅・城郭などにも祀られた。また、氏神・産土神と同一視され、村落においても祀られるようになり、神社一般をさすようになった。

平泉には中尊寺の鎮守として南方に日吉社・北方に白山宮を勧請したが、これが樋爪氏の信仰内容に影響を与えたことは十分考えられる。白山宮にはかつて樋爪五郎季衡の持仏の聖観世音像(運慶作)と源義経の持仏の毘沙門天が安置されていたが、嘉永2年(1849)に焼失したとする(高平眞藤『平泉志』巻之下)。比爪館にも祈願所として寺社が整備されたことは確実であろう。

比爪館跡からは13世紀の仏具が出土していることから、薬師堂(薬師神社)や大荘厳寺以外の宗教施設が存在した可能性は否定できない。

土館の新山神社の前身である新山権現社と新山寺は、鎮守社と別当寺の関係にあった。また、赤沢の白山神社の前身である白山権現社には別当寺として寂静山蓮華寺があり、鎮守社と別当寺の関係にあった。この二社は、樋爪氏が産金地の鎮護のために、西に新山権現、東に白山権現を勧請し、その別当寺として新山寺と蓮華寺を配したとする考え方があり、注目される。

現在の薬師神社は、社伝のとおり樋爪俊衡が勧請したとすれば、大荘厳寺が創建された頃からその鎮守社であった可能性があり、鎮守社としての歴史は12世紀に遡ることとなる。明治期の神仏分離政策で薬師堂別当の大荘厳寺は廃止され、薬師堂は「薬師神社」に名称を変えて地域の鎮守社としての機能を果たしていった。